

芥川龍之介が短い生涯を閉じたのは昭和2年（1927年）のことだった。享年35歳。死因は睡眠薬の大量摂取である。若くして夏目漱石に才能を認められた芥川は、「羅生門」「鼻」「芋粥」など古典に着想を得た秀作を次々に発表、作家としての地歩を固めるが、30歳前後から身体の衰えが目立ち、不眠や抑うつなど精神の不調にも苦しめられていた。

帝大卒らしい理知性と繊細さ。美への強いこだわり。憂鬱症。晩年の私小説的な作風。自死に至る彼の心にはいったい何が起きていたのか。

デイヴィッド・ピースの『Xと云う患者 龍之介幻想』はまるでそんな問いに答えるかのよう、芥川の精神への肉薄を試みる異色の連作短編だ。一見、評伝風だが、その手法は斬新で驚きに満ちている。はじめ戸惑う読者もいるかも

## Xと云う患者

デイヴィッド・ピース著

# 鮮烈な芥川像を示す異色作

しれないが、やがて著者のたくらみはこちらに浸透、鮮烈な芥川像が見えてくる。

漱石との師弟関係、精神科医斎藤茂吉による治療、長崎訪問、中国行き、関東大震災など各編の柱を成すのは伝記的事実。しかし、描写は克明というより想像のふくらみに満ち、人物たちの心の裏にわけいる手つきは大胆だ。

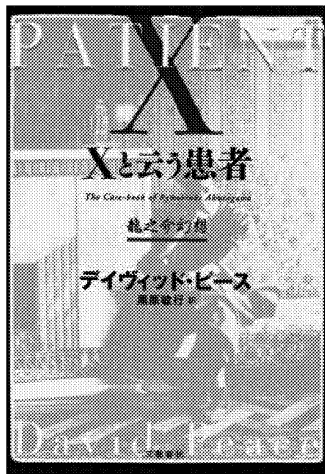
それだけではない。この作品はいわばコラーージュ仕立て。芥川作品のプロットや描写を組みこみ、堀川保吉など作中人物も登場させながら、虚と実の間を行き来する。

そこで大きな効果を発揮するのが、ピースならではの呪文的文体だ。「やがて老婆は何か呟き、囁き、溜息をつき、呻きながら、死骸の群の上を這う、這って行く、

梯子の口まで来ると、顔を倒にして、髪を垂らし、梯子を見下ろし、門の下の、黒洞々たる夜を覗きこむ。……」

低い囁きめいた語り的心声は何度も重ねられるうちに意識の奥に届く。聞こえない声が聞こえ、見えないものが見える。そこへ死の匂いの漂う秘儀的な瞬間。芥川がマリア像を抱えとる場面は神々しくもかすかにエロチックで、奇妙な美しさをたたえる。

こうして文章の安全装置を外し、答のない暗がりを読み迷うことでこそ、精神の奥はとらえられるのだろう。かくも謎めいた世界を芥川は生きていたのだ。



原題＝PATIENT X  
（黒原敏行訳、文芸春秋・2400円）  
▼著者は67年英国生まれの作家。『1974 ジョーカー』など犯罪小説を多く執筆。

《評》東京大学教授

阿部 公彦